

<原 著>

第42回 日本赤十字社医学会総会 優秀演題

研修医として体験した新潟県豪雪災害での救護活動

新潟大学医学部放射線科¹⁾, 長岡赤十字病院救命救急センター²⁾羽根田 淳¹⁾ 内藤万砂文²⁾How I supported people who lives in Tsunan, Niigata where
the heavy snow fall took place in my first year of residentJun HANEDA¹⁾, Masafumi NAITO²⁾University of Niigata Department of Radiology¹⁾, Nagaoka Red Cross Emergency Center²⁾**Key words** : 新潟県豪雪災害, 研修医としての医療救護活動, 孤立集落

はじめに

新潟県津南町秋山郷集落の豪雪災害は研修1年目の後半におこった。医師としてまだまだ未熟であったが、救護班の一員として参加する機会を頂いた。その初めての医療救護活動の経験を報告する。

新潟県豪雪による孤立集落秋山郷における救護活動

2005年12月末から激しく降り続いていた雪が、新潟県津南町の山間にある秋山郷において積雪4mに達した。2006年1月に国道が閉鎖され、津南町秋山郷の5集落、69世帯199人が孤立状態となった。雪崩に伴う二次災害回避のために、国道の閉鎖は長期化する見通しとなった。1月10日午前10時30分に、新潟県から当院に医療救護班の派遣要請が来た。赤十字医療救護班は通常、医師1名、看護師3名、主事2名で構成されるが、研修医の私も加えてもらえる事になった。救護活動への誘いは突然であった。CT室で検査を見守っている時に指導医から声をかけられた。「救護班に連れていくからすぐに準備をしろ。10分後に出発する」。身支度はもちろん、心の準備もまったく出来ていない。研修1年目の身でベッドサイドの診療によく慣れてきた頃である。医療器具の揃った病棟とは異

なり、限られた器具だけの診察で的確な診断を下せるのだろうか、不安一杯の気持ちになった。そんな私の様子を見ていた看護部長さんは優しい励ましの言葉とともに、救護服の準備までして下さった。当時まだ当院のヘリポートは完成していなかったため、近くの長岡市ヘリポートから県警ヘリコプターで孤立集落に入る事となった。取る物も取り敢えず慌しく病院の救急車に乗り込んだ。ヘリポートには長岡市消防本部の方が数名いた。安全管理のために来て下さったとの事であった。しばらくすると激しい風と大きな音とともにヘリコプターが着陸した。高揚した気分のまま搬入する救護資機材の準備に追われた。後になって知った事であるが、重量オーバーのため搭乗者を1名減らす必要があったとの事。そして指導医が県警の方と交渉の結果、座席を取り外してもらい私も搭乗出来る事になった。

ヘリコプターからの風景は白銀の美しい絶景でみとれていたが、着陸と同時に現実に引き戻された。4mもの積雪が自然の猛威として住人に襲いかかっていた(写真1)。郵便局の2階が克雪センターという施設で、その大広間が救護所となった。診療の準備をしていると、集まってきた多くの住人の笑い声が聞こえ、会話も弾んでいた(写真2)。お互いの無事を確かめ合っているかのようで、豪雪と孤立が大きなストレ



写真1 豪雪の孤立集落



写真3 救護所での診療



写真2 診察前の救護所風景

スになっていたようだ。受診された方の訴えは筋肉痛、腰痛や不安などが多かった。高血圧や糖尿病などの慢性疾患で常用している薬が残り少ないと心配される方も多かった。保健師さんを通して町立病院にお願いしたところ処方いただける事になり、除雪車で運び入れて貰える事になった。「健診目的の日帰り救護」の予定であったが、しばらくして帰りのヘリが飛ばないとの連絡が入った。私たち救護班も孤立してしまった。現地ではその時間帯は快晴であったためヘリコプターの出動地である新潟市の天候が悪い事が理由のようであった。救護所に足を運べるのは健康な人であり、具合が悪くても自宅に留まっている高齢者がいる可能性が否定出来ない事から、指導医は地域の保健師さんと共に訪問診療に出かけてしまった。研修医の私が救護所を守る事になった。困った事があつたら携帯電話で相談すればよいと考え、不安な心を励ました。何名か診察したが、最も緊張したのは除雪作業をしていて肩関節の亜脱臼を起こした

と思われる高齢の女性が訪れた時であった(写真3)。戻ってきた指導医が診察し、整復に成功した時はほっと胸をなでおろした。また、保健師さんが地域のすべての住民のことを把握していたので、スムーズな訪問診療ができたと言指導医は感激していた。

夕方になり受診者もいなくなったが、外に目をやると再び降り出した雪が街灯の光に反射しきらきらと光っていた。その中でお年寄りが除雪作業をされていた。少しでもお役に立てばと考え、除雪作業の手伝いを申し出た。スノーダンプという、スコップの10倍くらいの道具を用い、雪を用水路に落としていく作業であった。やってみると見かけほど簡単な作業ではなかった。私の力任せの作業に比べ、おじいさんはゆっくりではあるが着実であった。お話をしながら除雪作業を行った。秋山郷の景色が素晴らしいことや、ドラマの撮影があったことなどを教えてくれた。作業が終わると、自宅に招いていただき自家製のおしるこや缶ビールをご馳走になった。その美味しさは格別であった。この日はそのまま救護所に宿泊する事になったが、一晩中2台のストーブを焚いていないと冷え込む寒さで、壁にもたれかかると体温が奪われていくのが感じられた。

一夜明け、現地の天候は決して悪くはなかったが、この日も迎えのヘリは飛ばなかった。救護所での診療を終えたのちに、二手に分かれて巡回診療を行うことになった。巡回することで集落全体の様子がわかってきた。玄関や道路は雪で埋まっており、また除雪された道路も坂道



写真4 訪問診療向かう救護班

は滑って転びやすく、高齢者には外出も困難と思われた(写真4)。家屋の一階部分は雪に埋もれ室内は暗かった。窓が壊れて外の雪が進入してきたらと考えると背筋が凍る思いがした。中に入ると薪ストーブが暖かく迎えてくれた。診察時に wheeze の聞こえる高齢者がいた。私たちが訪問すると手をあわせて感謝してくださり、外に出られるようになったらかかりつけの医院を受診するつもりとの事であった。発作や体動時の息切れもなく、緊急性はなさそうであった。うずたかく雪の積もった屋根の上で犬が元気に吠えていたのが印象的であった。再び診療所に戻ったが、ほとんどの人が初日に受診していたためか診療所を訪れる人はほとんどなく、空いた時間をまた除雪作業の手伝いに出かけた。

3日目は早朝から雪がしんと降っており、今日もヘリが飛ばないことは容易に想像できた。再び巡回診療に出たが、医療ニーズはほとんどなくなっていた。マスコミ関係者や、除雪のための自衛隊員が多数集落を訪れるようになった。道路は安全に通れるとの事である。指導医が行政の人に交渉してもらった結果、自衛隊のジープで孤立集落から出して貰える事になった。ジープで山を離れる道中、安堵感から初めて疲労感を覚えた。まず津南町役場に行ったが、多くのマスコミ関係者でごったがえしており、孤立集落の静けさがうそのようであった。病院と日本赤十字社新潟県支部の方が迎えに来てくれ、夜遅く3日ぶりに病院に帰りついた。院長先生、看護部長さんや事務長さんら病院幹部の方々が残っていてくれて、暖かく迎えて頂いた



写真5 救護班を出迎えてくれた病院幹部

時は、うれしさと同時に重大な任務を果たして来たのだという思いで身が引き締まった(写真5)。こうして3日間の豪雪地域での救護活動が終了した。

考 察

わずか3日間という短い期間ではあったが、今回の豪雪孤立集落での救護活動は貴重な経験となった。

救護所に集まって来た住民の表情は、最初は疲れ果てている印象であった。道路が閉鎖され孤立してしまった事で常用薬、食料や燃料の不足、積雪による自宅崩壊の危惧、隣近所との交流が途絶える不安などさまざまな悩みを抱えていたのだろう。しかし救護所に多くの住人が集まり、お互いの無事を確認し、会話をすることで少しずつ笑顔が見えるようになっていった。また高齢者ばかりで労働力が足りず、かかりつけの医療を受けられないなどの不安を話されたが、私自身は無力で住民の方の話に耳を傾けるのが精一杯であった。このような環境下での救護班の存在は意義あるものと強く感じられた。

肩を痛めながらも家屋倒壊の恐れから除雪作業を続けていた高齢者の姿や、また喘息をもちながらもかかりつけ医を受診できない状況などからも、豪雪の怖さを実感させられた。

除雪作業の手伝いも忘れ得ない思い出となった。住民の方と一緒に作業をする事で、診察の時には聞けない色々な話を教えて下さった。初めて参加した救護活動ではあったが、住人の方との距離を近く感じ、また感謝された事は教科

書や通常の診療からは学ぶ事の出来ない貴重な経験となった。

災害時の医療救護活動に必要な事は、医療以外の事に対しても積極的に活動すること、被災者の方との会話にはじっくり時間をかけること、そして救護活動には多種多様なニーズがあるということを経験した。

おわりに

研修医の立場で医療救護活動に参加し多くを学んだ。「医師は医療をやればよい」という考え方は変わった。救護活動で求められたものは「信頼関係」であり、日常診療においてもこれは変わらないと思われる。多種多様なニーズに対応できるよう、今後さらに研鑽を積んでいきたい。